

# 広瀬淡窓の佐伯行

『懐旧楼筆記』 卷五・四方負笈より

よもにきやうをおう

本文訳 佐藤 巧

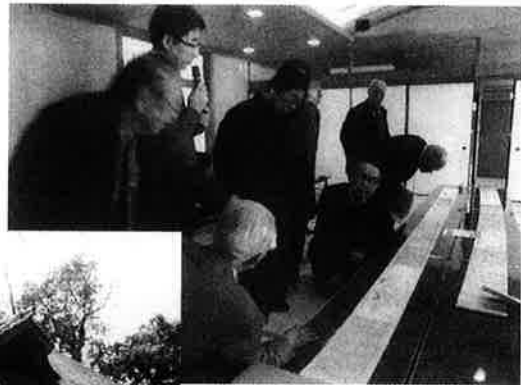
漢詩訳 木許 博

まえがき

昨年十二月二日、日田市の淡窓会の一行二十数名が善教寺の「咸宜園図」を見学に訪れ、佐伯からは桑門・木許・鶴野・那木・渡辺・佐藤が対応して交流会が持たれた。遠隔の地でありながら日田と佐伯とは歴史的に関係の深い間柄であることを改めて確認しあつた。

日田教育委員会の吉田氏より国史跡「咸宜園」の整備計画についての説明を聞き、「佐伯文庫」や藩校「四教堂」が未だその緒につかないことを恥ずかしく思った。

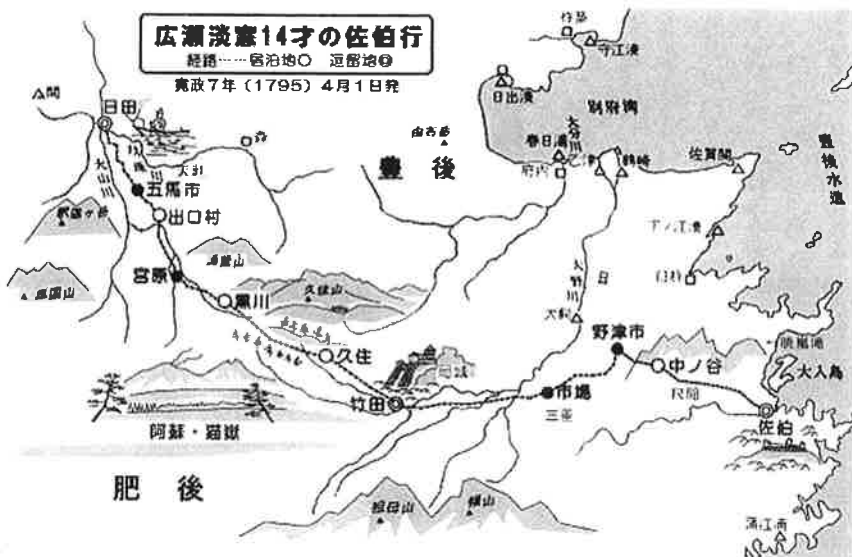
淡窓は十四歳の時に松下筑陰先生を頼つて佐伯の四教堂へやつて来た。その行程が『懐旧楼筆記』に記録されており、活字版のコピーを頂いたので、読みやすい現代文に直して紹介したい。



上：善教寺布岳の「咸宜園図」を見る日田淡窓会の一行



左：国史跡「咸宜園」秋風庵



#### 四方に笈を負う(遊学す)

寛政七年(一七九五)私が十四才のとき、魚町の父の膝下に暮らしていた。前年、松下先生が佐伯に赴かれ、法蘭上人も亡くなられたので、師と仰ぐ人がいなくなった。そこで父は「佐伯へ往つて松下先生に師事するよう、日田へ帰つた後は再び他国へ遊学するように」と、私に命じられた。それで専ら佐伯行きのことを考えていた。

私は今春より佐伯に遊学することが既に決まっていた。ある日、佐伯城下の米屋七兵衛という者が、太宰府へ行く途中に我家へ訪れた。これは父が松下先生に私の遊学のことを通知していたので、先生は七兵衛にその返事をことづけたのである。父は私を七兵衛に会わせて佐伯へ滞留中のことを託された。

ついに四月一日、家を出立。佐伯は日田から三十七里(約一四八キ)もあり、私にとつて初めての遠遊となったが、そのときは幼弱だったので紀行の詩文も作っていなかった。その後二十年を経て、佐伯の僧で懐澄という者が日田に来て桂林園に逗留したとき、私は懐旧の詩を十篇作つたので、今ここに附録する。



上：五馬高原から日田方面を望む



左：出口村付近の日田往還

四月一日家を発す。治助という僕(使用人)をしたがえ、竹田の僧で定水じょうすいという者を伴っていた。この僧は竹田の矢柄という士人の養父で、隠居の後に禅僧となつて諸方に遊歴していた。日田の河島弥右衛門の弟武吉が養子となり、その縁で河島家に逗留していたが、このたび竹田に帰るといふので、父が幼弱な私を心配して同行のことを託したのである。家より四里(一二キ)、五馬市(天瀬)といふ所を過ぎる。

【懐旧の詩—第一】

我年十四試遊方

肥水豊山道路長

五馬原頭廻首望

故園喬木已微茫

我年十四、方に遊ぶことを試む

肥水豊山、道路長し

五馬原頭首を廻らせて望めば

故園の喬木、已に微茫

【通 釈】

私は年十四歳のとき四方に遊学しようと考え出かけたが、肥後豊後の道のりは長い。五馬市の原から眺めると、ふる里の田園の高い樹木もはるかにぼんやりと見えるだけだ。

この日は宮ノ原という所まで到る予定が、途中雨に遭つ

て果たせず、<sup>いでぐら</sup>出口村（天瀬）に宿った。我家より五里（二〇キ）、出口の里正（庄屋）彦右衛門という人は父の知人で、私のために近くの農家を借りて泊めてくれた。

二日、出口を發して宮ノ原に至るまで四里（一六キ）。これより本道を行けば久住に到るまで九里（二六キ）、中間に投宿できる家はないので、間道を通り黒川という所へ向かった。ここは極めて岐路多く旅人はしばしば迷うようである。我々も道に迷って二〜三里の道をいたずらに歩いて、ついに黒川の手前で日が暮れてしまった。田中の教軒の民家に至り宿を願ったが断られ、一軒だけ道に迷ったのを憐れみ泊めてくれた。ここは村でも良い家柄と見えて居宅の構えも特に整っていた。

【懐旧の詩―第二】

鏡池東畔雨傾盆

かがみいけとうはん  
鏡池の東畔、雨盆を傾く

匹馬長嘶日色昏

ひつばちようせい にっしょくぐら  
匹馬長嘶して日色昏し

馨沸温泉鳴似鼎

ひわか  
馨沸温泉鳴ること鼎に似たり

隔林認得黒川村

林を隔てて認め得たり黒川村

【通 釈】

鏡池（宮ノ原）の東はどしゃぶりの雨、一匹の馬がいなないて辺りは夕暮れのうす暗さ。温泉（黒川）



上：宮ノ原（小国町）の商家



左：鏡ヶ池（湧水）



久住山と大船山（日田往還道より）



猫嶽と阿蘇山（日田往還道より）

のふき出るさまは鼎（かま）の沸る音に似る（地獄）。  
林の向こうにやと黒川村を見つけた。

鏡池とは宮ノ原の傍そばにある池の名である。池の中に古い鏡があったので名づけられた。黒川には温泉があつて地獄とも言われている。

三日、その地を發して久住原をよぎる。ここは肥後の境内で平原が数十里、極めて空豁くわかつ（人氣のないさみしい谷）である。

西南に当たつて阿蘇山を見る。その傍に猫嶽ねこがきという山があつて、その高さはほとんど阿蘇に匹敵する。阿蘇は山容さんよう明媚めいびだつたと記憶するが、その頂より煙を生ずることが多い。猫嶽は山容さんよう猛悪もうあくである。

東南に九重山・大船山が並びそびえている。また竹田の城外に祖母山があつて、三山とも極めて高く阿蘇と高さを争っている。しかし阿蘇の名は海外にも聞こえているが、他の山を知る人は少ない。山は必ずしも高いばかりが良いのではないと知るべきである。

【懐旧の詩—第三—】

長空杳杳鶴呼群　長空杳杳として鶴、群を呼ぶ

南国山川晴自分 南国の山川晴れて自ずから分く

最怪蘇峰煙一點 最怪蘇峰、煙一點

須臾結作滿天雲 須臾にして結びて滿天の雲と作る

【通 釈】

高い空はるか鶴が群れて鳴いている、ここ南国の山や川は折からの晴天のもと、くつきりと目にうつる。

ひどく奇怪な形の阿蘇の峰に湧いた一点の煙は、忽ちのうちに滿天の雲となつて広がる。

この日久住の旅店に投宿した。

四日、竹田の城下に着く、久住より三里（一二キロ）。定水と別れ古田代助という人の家に行き投宿した。代助は古田織部の子孫で一般庶民だが名家である。その兄を喜兵衛といい禄をはむ人で別居している。代助の子を藤助という。代助兄弟と藤助は私の伯父や父と親交があり、彼らは日田にも往来して私も知っていた。

代助は生花や茶湯を好む風流人で、白松亭主人と号す。喜兵衛は国学を好み、寛齋と号す。篤実の人である。私は古田の家に三日ほど留まり、竹田の城下を数カ所遊覧した。今くわしくは記さないが、そのうち碧雲寺という禪寺に遊んだ。これは竹田の先侯が朝鮮征伐の時に向こうの寺



久住高原の松並木



竹田「道の駅」附近

の額を持ち帰って、この地の額として寺号もその通りに付けたという。

彼の地にて塚口屋佐助・菱屋孫六・伊藤源兵衛などと会った。総体に日田より竹田までの道中は山坂が多く、無人の境が多い。竹田城下もまた山谷の間に険しい地形であるが人家は多い。私はここで初めて城郭というものを見た。

【懐旧の詩―第四】

千巖萬壑入岡藩

せんがんばんがく  
千巖萬壑、岡藩に入る

士庶肩摩道陌喧

ししよけんまどうはくかまひす  
士庶肩摩し道陌喧し

絶壁雲懸公子館

かくか  
絶壁、雲懸る公子の館

断崖泉落太夫門

たふか  
断崖、泉落つる太夫の門

【通 釈】

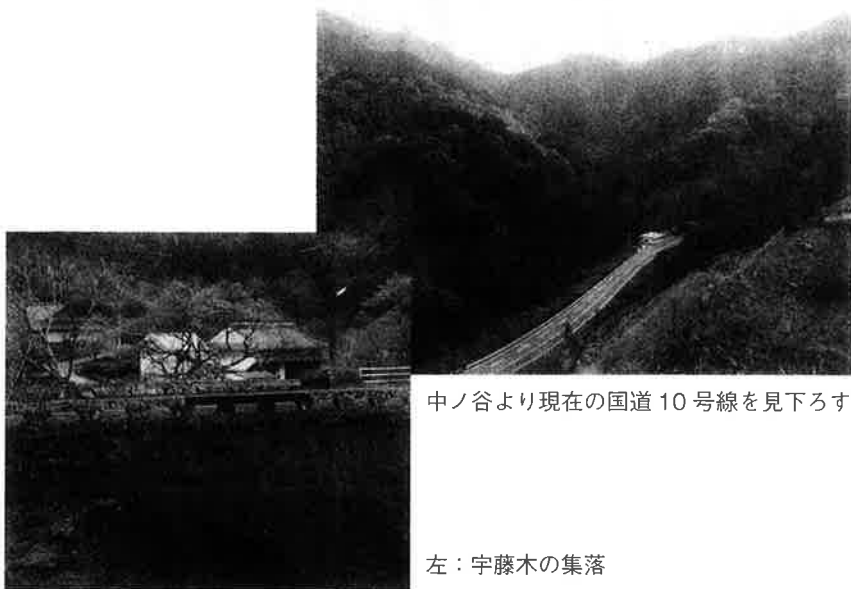
多くの岩や崖にかこまれた岡藩に入った、武士をはじめ一般人が肩をすりあわせるほど多く、どの道を通つてもにぎやかである。絶壁の上に雲がかかるほどに高くかまえた高貴な子弟の住居、断崖にかかる滝が落下する家老の邸宅。



竹田岡城跡



中川公菩提寺碧雲寺



中ノ谷より現在の国道 10 号線を見下ろす

左：宇藤木の集落

岡とは竹田の別名である。

竹田に二日留まり七日に至って出発した。ここで主僕二人となり、日田から竹田までは定水じょうすいの案内があり、僕（治助）もかつて来たことがあったが、竹田より佐伯までは初めての道である。しかも山谷無人の境を行くことが多く、来る人に道を問いながら進んだ。私は心細く思つて、はじめて旅の悲しさを知り、望郷の念がしきりに起こつた。竹田を去ること八里（三二キ）、日が暮れて中ノ谷という所に至り、一軒の人家に投宿した。

【懐旧の詩—第五】

中谷寥々人不行

中谷寥々りやうりやうとして人行かず

陰雲堆裏宿柴荆

陰雲堆裏いんうんたいり柴荆さいけいに宿す

乳狼夜半来尋食

乳狼夜半にゅうろうやはん来りて食をを尋ぬ

一徑菅茅踏有聲

一徑菅茅いっけいかんち踏みて声有り

【通 釈】

中ノ谷（峠）はものさびしくて人は通らない、暗い空の下に、石積をした内側に柴やいばらで囲まれた家に宿をとる。子に乳を与える狼が夜半に餌を求めてうろつく恐ろしさ、一本道の萱草の生えた所を歩いて来た狼の声に肝を冷やしたことであつた。



ここは極めて山犬の多いところと、後にも聞いた。

八日、中ノ谷を発し、行くこと八里（二四キ）にして、日暮れに佐伯の城下に着いた。日田より竹田まで二十一里（八四キ）、竹田より佐伯まで十六里（六四キ）、合わせて三十七里（二四八キ）である。

城下の入口に角石という関所があった。関所の役人が旅人を譏訶（そしり責める）すること極めて厳しく、私が松下氏の客であることを聞いて速やかに通してくれた。兼ねて聞き知っていたようである。

先ず米屋七兵衛の家に至る。七兵衛に会うと「松下先生の家は城中にあつて旅人が入れる所ではないので、しかし貴君のことは格別に上へ申し立てているので、二三日我家へ留まつて待たれるように」と、二階に案内して宿にしてくれた。その妻、その子徳次郎とも会った。その後、松下先生夫婦が七兵衛の家に來られて会うことができた。

九日、願いの筋は早速かなつて、松下の宅に入ることができた。佐伯の城は大手門が南に向かつていたと記憶している。山城にして城門ならびに侯宮（藩主の邸宅）は山下にある。楼櫓の類は山頂に見えている。その規模は竹田に比べて小さいが、また名城である。佐伯の先侯（毛利高政）

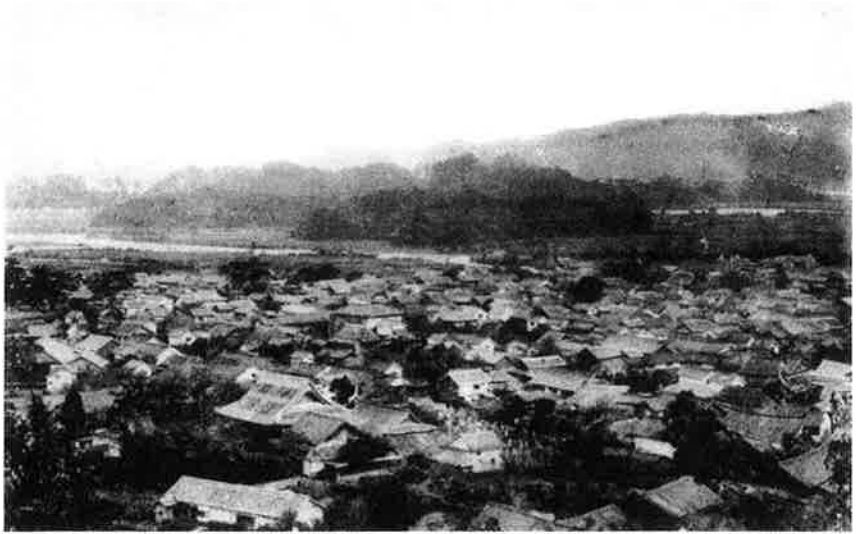


城山より佐伯町を望む（大正時代）



明治4年頃時代屋敷敷図

は、我が日田に居たことがあり亀王山がその城跡である。慶長年中にこの地に封を移されたという。城門に入ってその左に学校があり四教堂という。これは今の佐伯侯の叔父に扶搖公子という人があり、熊耳先生の門人で有名な文人だったが、その旧宅を学校にしたものだという。



城山より佐伯町を望む（大正時代）

松下の宅はその隣にあつて長屋の空いたところを住まいにしている。松下は去年この地に来られて未だ屋宅を賜つておらず、しばらくここに住んでいたのだ。その宅およそ三間にして畳二十帖ほどあつたと覚えていた。僕を廣平といつて去年日田に来たことがあるので見知っていた。佐伯城下は海に面しており、浦の数は九十九浦と呼ばれ土地は狭いが魚塩の利多く、士民は富饒（豊か）である。その城を鶴城と号している。

【懐旧の詩―第六】

鶴城楼閣海之濱

鶴城の楼閣海の浜

松緑沙明不起塵

松は緑に沙明らかにして塵を起

百浦魚塩民自富

百浦の魚塩、民自ら富む

風帆相接浪華津

風帆相接す浪華の津

【通 釈】

鶴城の城が聳え海の浜が続く、松の緑、白い砂の眺めは清らかで美しい。浦々には魚がとれ、塩が造られ住民は富裕にすぎず、風をはらんだ舟が大坂の港とつながつていそがしく通行する。



三ノ丸櫓門と石垣（大正時代）

【懐旧の詩―第七】

絃歌淡蕩動薰風

絃歌淡蕩として薰風を動かす

公殿南連泮水宮

公殿南に連なる泮水宮

身作國師門下客

身は國師門下の客と作り

遊居三月在城中

遊居三月城中に在り

【通 釈】

音楽、歌声がゆるやかにのんびりとひびき香りの良い風が吹く、公の殿堂が南につらなるのは藩の学校（四教堂）。自らは藩校師匠の門下生となつて、遊学（日田から）して三ヶ月、鶴谷城ですごしている。

佐伯学校の儒員（教授）松下先生は祭酒（長官）を勤めていた。その下に四人あり、野村丈右衛門・山本七兵衛・古田節右衛門・岩崎九兵衛である。学校の監（取り締まり）を古賀五郎左衛門といい、当時の目付で学監を兼ね、職は儒員の上にあつた。

学校に出入りする者は六〜七〇人、私は皆知つていますが、その内で最も親しかつたのは佐野良蔵という人である。私より六〜七歳年長と思うが、後に恒と名を改めたという。また通安（姓を忘れた）の子に謙次とい



池船橋と住吉神社（大正時代）

う者がいて、松下の家に来て書を習っていたので、私とよく同居した。そのほか山本方蔵・山本直太・池永宗蔵・遠城寺権平次・高瀬繁之丞・文平・百助・長五郎・半五郎など挙げればきりが無い。これらはみな学校生である。

そのほか知り合った太夫(官位のある者)では、梶西金左衛門、安斎と号す。年頃五〇位で当時の執権(家老職)を勤める名譽ある人である。私は松下に随行して度々お会いしたが、請われて贈序(別れの詩)一篇を作ったことがある。金左衛門の子の藤助も知っている。金左衛門の弟に山口利左衛門という人があり、その子鉄太郎の家で詩会があり、松下先生と伺ったことがある。

杉原唯右衛門という人があって、松下先生に連れられて赴いたところ饗応(もてなし)をうけた。射術を彼に学ぶようにと約束したが果たせなかった。赤沢忠兵衛という人は私を招いてもてなしたが、これは謙次に縁ある人であった。また阿南宇兵衛は去年日田に使者として来た人で私も面識があり、松下と最も親しくしていた。

### 【懐旧の詩―第八】

西谷南臺日走趨

無人迎送不文儒

西谷南臺日に走り趨く

人迎送するに文儒ならざる無し

青雲別有隣才者 青雲別して才を隣れむ者有らば  
數接安齋賢太夫 數安齋賢太夫に接せしむ

### 【通釈】

西谷南台(佐伯藩小名)は日々かけめぐって働いた、送り迎える者はすべて文人儒者であった。若者で青雲の志のすぐれた者があると、安齋賢太夫(梶西金左衛門)に引き合わせた。

西谷南台は佐伯城下の小名である。このとき佐伯侯(高標)は東都(江戸)に参勤中で、君侯が在城ならば必ず私を引見しただろうと人は言う。侯は文学を好み極めて博聞強識の人である。佐伯は蔵書に富むこと海内無双(日本一)といわれ、全てこれは侯の求め貯えたものである。

城外に羽明山龍護寺がある。六―七月の頃と記憶するが、その寺に開帳があり、月夜に舟を浮かべそこに赴いた。時に城下より納涼かつ寺詣でに舟を浮かべるもの数知れず、管弦謳歌の音が洋々と海面に満ちている。松下は横笛を得意とし、その弟子と笛を吹いて和み、とても楽しい時を過ごした。

【懐旧の詩―第九】

羽明山下水初波

羽明山下、水、初めて波うつ

龍護寺前移棹過

龍護寺の前棹を移して過ぐ

幾隊畫船齊浮月

幾隊の画船齊しく月に浮く

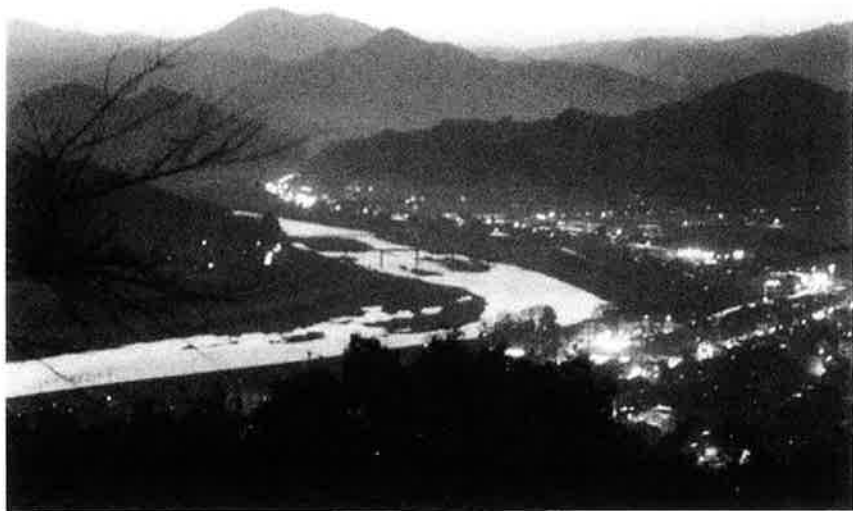
繁絃争奏竹枝歌

繁絃争奏す竹枝の歌

【通 釈】

羽明山龍護寺の下、川（番匠川）に川波が立って、寺の前あたりは水棹、艚をしきりに動かして通りすぎる。幾つかの群れの絵書きの船が一斉に月下の川に浮かんでいる。音楽がしきりに争うように演奏され、この地方の風俗独自の曲が流れる。

佐伯に留まるうち毎度のように舟遊びをした。舟を浮かべて三里（一二キ）程の地に瀑布（暁風の滝）を見に行つたことがある。往き返り六里（二四キ）、私にとつて舟行の中で最も遠い体験であった。船中で江豚という魚が半身を露して波を鼓動（産卵の様子）しているのを見て目を驚かせた。



番匠川（龍護寺川＝龍川・龍溪・龍水ともいう）

八月に至り、家（日田）より長吉という僕が迎えに来たので、佐伯を発つことになった。日は何日と記していないが、彼の地を去るときには頗る并州故郷（第二の故郷）の感があった。松下先生から送序一篇（別れの詩）七絶一首を贈られた。米屋七兵衛は関下まで送ってくれ別れた。

途中荷物が重たくて長吉は肩を傷めたので、荷物を分けて人の家に託し、およそ三日で竹田に着いた。私は幼弱なので不慮のことに逢つてとても気疲れした。竹田では再び古田氏に二日ほど留まった。長吉は立ち返つて預けた荷物を取つてきた。古田家では浪華の人で亀齡軒という生花師に会った。竹田を発つとき定水和尚が日田に赴くというので同行した。初日に久住、第二日は宮ノ原に宿り、第三日に日田に着いた。

佐伯に遊んだことは必ずしも習学のためではなく、追々遠方に遊ぶための初歩的な体験をすることにあつた。ところがその後は多病の身となり、遠遊の志は遂げられず、ついに佐伯行が唯一の遠遊となつた。本意に背くこと甚だしく感慨深いものがある。

佐伯より帰つて後（二〇年後）、三十四才のときに、佐伯養賢寺の僧懷澄が来て私の塾に留まった。私は彼と佐伯の



浅海井 曉嵐の滝（大正時代）

旧遊を語り旧知の人の安否を問えば、過半の人は黄泉（あの世）に赴いたという。感嘆にたえず十篇の詩を作った。

【懐旧の詩一十】

桑梓帰来二十年

そうしきらい  
桑梓帰来二十年

偶談往時淚潸然

たまたま おうじ  
偶、往時を談じて淚潸然たり

君言龍鼎山前路

りゅうていざん  
君、龍鼎山の前路を言うに

古墓新墳艸似煙

こぼしんかみん くさ  
古墓新墳、艸煙に似る

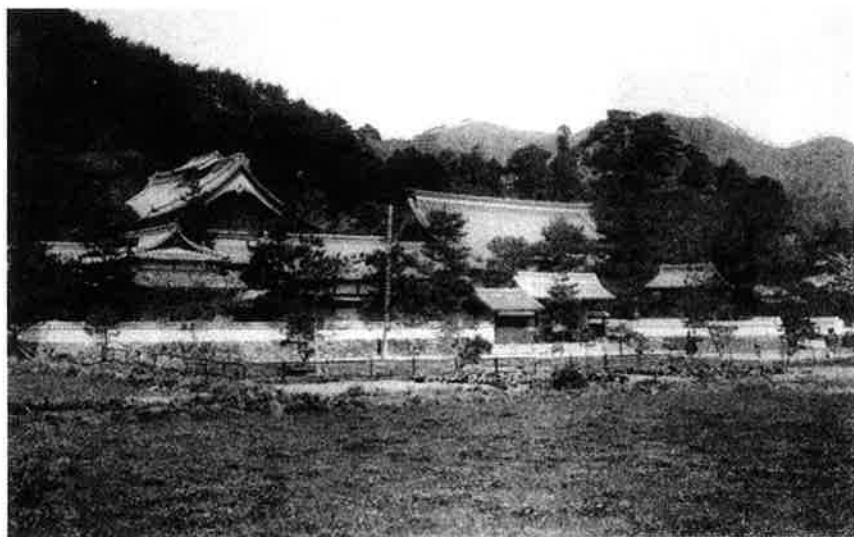
【通 釈】

故郷日田に帰ってきて二十年を経た。たまたま、昔のことを話すとしきりに涙が落ちる。君が龍鼎山（養賢寺）の前の路の話をする、古い墓、新しい塚に眠る故人を思い出し、あたりの草は煙のようにたなびき繁つていたのを思うといたましい。

りゅうていざん

龍鼎山は養賢寺の山号である。養賢寺の境内はとても広く、佐伯侯の菩提所である。家中の墓も多くそこにあるという。私が佐伯にいたとき養賢寺の隠居に会った。詩を得意とする人で、共に詩会を開いたこともあった。

（佐伯行おわり）



佐伯藩主毛利家菩提所・龍鼎山養賢寺（大正時代）